

全国小学校英語教育実践研究会 令和2年度 「わたしの英語教育実践」	6年 外国語（2018年～） 東京書籍『NEW HORIZON ELEMENTARY』・『We Can!』
⑥小・中連携の取組	東京都 杉並区立杉並和泉学園（新泉和泉小学校） 小学部英語専科 竹内 淑香

## 「学びの連続性・系統性」を意識し、小中教員が協力する授業作り

本学園は、施設一体型小中一貫教育学校であり、小中学部の教員が日常的に関わり合える良さを生かし、協力して授業作りを行い、中学部教員が小学部に乗り入れたT T形式の授業等、実施している。また、校内研究においても、小中学部の教員が連携して研究を行っている。

小学部段階で慣れ親しんだ英語表現を基礎にして中学部でより深い学びにつなげていくための系統的な見通しを小中学部の教員が共にもち、「学びの連続性及び系統性」を意識した指導をしていくことが重要である。以下、杉並区の教育研究授業として実施した小中連携授業（2019年10月2日第6学年にて）について述べる。

**単元名** 「What do you want to watch?」（『We Can!』2 Unit 6）

**本時の目標** □既習表現を応用し、自分のしたいことについて表現することができる。

**本時の展開**

**中学校との接続において重視した点**

①指導法の共有 言語材料の習得のための適切なパターンプラクティスの設定、多種多様なアクティビティのアイデアや課題解決的な学習の目標設定等、中学校での実践を、児童の発達段階に合わせて工夫・改善するなど、それぞれの校種における指導法の特徴や長所などを生かしながら、指導法を共有して、より効果的な指導を行う。

②ワークシート等の共同開発 「We can!」のフォントを活用したスポーツカード（かるた）



③授業を「活動」で組み立て、段階的に指導

④練習量の確保（リズム・テンポを重視したパターンプラクティスの工夫）


⑤教材の共有 学習への動機付けを高めるために、東京都教育委員会発行『オリンピック・パラリンピック学習読本』を活用。中学生用に掲載の英語での競技名を活用し、言い方に慣れ親しませた。

⑥「状況設定」を必ず行いオーセンティックな活動となるよう工夫

⑦文法指導の観点で、小中の見通しをもった学習計画の立案 「want」を基本に、目的語を既習の動詞に入れ替え活用させ、不定詞の汎用性について気付きをもたせる。中学校での学習が一層効果的になるような指導の工夫が小中教員が連携した授業実践の強みである。

⑧言語活動のある授業 英語によるコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目標とした中学校段階での英語科指導につなげていくために、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う「言語活動」を重視する。

中学部 工藤信輝 教諭



分	学習活動	留意点
2	1 あいさつ	・明るく、笑顔で行う
5	2 復習 1 既習表現の復習をする	・既習表現に繰り返し触れさせる。
5	3 復習 2 前時の復習をする	・テンポよく復習させる。
3	4 Small Talk 「行きたい国」についての教員同士のやり取りを聞く。	・「want to」の表現が、会話の中でどのように使われるのかを聞かせ、見せる。
4	5 復習 3 既習の動詞を復習する。swim, ski, play, eat, drink, see, go to	・児童が飽きないように、リズム・テンポよく進める。 ・既習の動詞を活用した表現の復習をさせる。
10	6 状況設定とダイアログ練習 A: I want to go to ~. B: What do you want to do? A: I want to ~. ※動詞を入れ替える swim, ski, play, eat, drink, see, go to	・ダイアログの使われる状況（場面）を見せる。 ・「want to」の表現が、目的語を既習の動詞に入れ替えて活用することで、不定詞の汎用性について気付きをもたせる。 ・口頭練習は、スモールステップで進める。 ・単語を入れ替えて練習させる。
10	7 アクティビティ I want to ~の表現に、既習の動詞などを活用して、自分のしたいことを発表する。	□既習表現を応用して、自分のしたいことについて表現することができる。
5	8 ふりかえり	
1	9 あいさつ	

### 指導助言・アドバイスコーナー

文部科学省が毎年度実施している「英語教育実施状況調査」（2019年12月実施）のうち「小中連携」に関する調査結果によると、小学校新学習指導要領移行期間に当たる2018、19年度小中連携を行った中学校区は、それぞれ80.6%、82.0%です。移行期間においても2割の中学校区で小中連携がなされていないことは、課題だと考えています。さて、本実践は、施設一体型小中一貫教育学校の強みを生かし、中学校英語科教員と小学校教員によるものです。そのような環境だからできる実践だと片付けてしまわず、本実践からは、小中学校教員がそれぞれの指導の特徴や長所を生かしながら、指導に当たっておられる姿勢を学びたいものです。小学校では、初めから型があり、言葉を入れ替えるだけの練習や文法指導をするのではなく、設定された場面の中で子供が実際に既習句や表現も使いながら自分の考えや気持ちを伝え合う中で、言葉の使い方を学んでいくことを大切にしています。小中接続や連携においても、この特徴が生かされるようにしたいものです。（文部科学省 視学官 直山 木綿子）